資料紹介　黒田乙吉とゴーリキイ、モスクワ文壇

斎　藤　慶　子

本稿は、黒田乙吉（1888–1971）とマクシム・ゴーリキイ（Максим Горький 本名：アレクセイ・マクシモヴィチ・ペシコフ Алексей Масимович Пешков 1868–1936）との交流に焦点を当て、それを物語る資料を紹介することを目的とし、さらに黒田とモスクワ文壇の交流についても考察する。

早稲田大学図書館は2012年７月、黒田の長女にあたる不破純子氏から、黒田に係る一次資料の寄贈を受けた。これは、大阪経済法科大学学長の藤本和貴夫氏から、本学政治経済学術院教授の鈴木健夫氏経由で、不破氏が早稲田大学に寄贈したい旨のご意向をお持ちであると伺ったことから話が進み、当館寄贈担当者が不破氏宅を訪問して当館収蔵の運びとなった。

寄贈された資料は、原稿、絵葉書、切り抜き、印刷物、ノート、手紙、色紙、カセットテープ、日記、写真などで、全体として千点を超える。今回は、特に黒田とゴーリキイ、モスクワ文壇との交流に関する資料を中心に紹介する。なお、本稿中の手書きのロシア語資料の翻刻は、本学ロシア語講師岡野エレナ氏に依頼し、和文崩し字の翻刻は早稲田大学図書館資料管理課の小林邦久氏にご協力いただいた。筆者は早稲田大学図書館の依頼により本資料を紹介することとなった。

黒田乙吉については、今まで研究対象として取り上げられることが少なく、本資料は彼の仕事を理解、評価するための、非常に貴重な情報源となることが期待される。黒田乙吉は1917年のロシアにおける二月革命、十月革命の両方をモスクワで実際に経験し、大阪毎日新聞社の特派員として、これを日本へ向けて報道したことで知られている。さらに1925年にモスク

ワを再訪した際には、滞在２年の間に現地の文壇、画壇との親交を深めた。黒田の著書『悩める露西亜』（黒田、1920）と『ソヴィエト塑像』（黒田、1948）は、それら貴重な経験の成果となっている。

黒田乙吉についての先行研究としては、まず菊地昌典による「黒田乙吉翁小伝」という、黒田とロシアとの関わりを中心にまとめた短い伝記がある（菊地、1974）。小山内道子は２本の論考（「『月刊ロシヤ』（1935～1944）を渉猟して――雑誌の起源、そして米川文子、マトヴェーエフ、黒田乙吉を読む――」（小山内、2010）、「『日本最初のモスクワ特派員』・黒田乙吉――明治末期日本のロシア文化環境からハルビンへ――」（小山内、2013））を発表した。ただし、それらで主に扱われているのは、黒田が初めてモスクワを訪れる前に６年間滞在したハルビンでの生活、及び二度目の訪ソからの帰国後の時期のことである。最近では、太田丈太郎が著書『「ロシア・モダニズム」を生きる―日本とロシア、コトバとヒトのネットワーク』（太田、2014）の中で、黒田とソヴィエト文学界の人々との交流について記した。しかし本稿では、先行研究において触れられてこなかった資料についても紹介できることを強調しておきたい。

本稿の前半では、モスクワ文壇との関わりを示す断片的な資料を、事実関係を補足しながら紹介する。後半では、ゴーリキイに関する原稿を、掲載情報とともに列挙し、最後に未刊行と思われる黒田の本学における口頭発表原稿「人間ゴーリキイを語る」（和文）を抜粋して紹介し、締めくくりたい。なお、本稿で紹介する資料の翻刻と和訳は末尾に掲げる。

黒田乙吉は、明治21年（1888年）12月19日、福岡県に、襖屏風の絵師の次男として生まれた。明治43年（1910年）３月に熊本師範学校を卒業した彼は、学友に借財をしてロシアを目指す。しかし「ロシヤに行ったら、トルストイとゴーリキイには是非あってみたい」（菊地、1974、p. 157）と思っていた彼を、同年11月、日本からの出港の地、門司で迎えたのは、トルストイ逝去の知らせだった(1)。このようなわけで、黒田のロシア訪問の一番

の目標は、当初からゴーリキイに会うことに絞られていた。そして、ゴーリキイとの交流は、黒田の人生においても重要な位置を占めることとなる。

1．モスクワ文壇

大正５年（1916年）６月からの一度目のモスクワ滞在において、黒田はゴーリキイに会えるかもしれないという「少なからぬ期待を以て文芸協会にも出入りしたが」（黒田、1920、附録 p. 77）、それは果たされなかった。しかしゴーリキイに会うという目的は、黒田をまずモスクワ文壇へと導いた。

黒田乙吉がモスクワ文壇の面々と個人的な交流を持ち始めるのは、大阪毎日新聞のモスクワ特派員として訪れた二度目の滞在期間中（1925–1927）のことのようである。彼は1925年７月に同地に到着した。

新聞記者としては、「広くそして深くその国の人々と交らねば」（黒田、1954、p. 59）満足な仕事にならないにもかかわらず、当時のソ連体制下では、まず資本主義国の記者が政府の要人と個人的な交流を持つことはありえないことで、さらに「一般市民はもち論（ママ）のこと、我々を疫病神のように取扱った」（黒田、1954、p. 59）と、本人は雑誌『ソ連研究』に報告している。そのような中で彼をフランクに迎え入れたのが文化界の人々だった。

> 私の二度目のモスクワ生活がはじまつ（ママ）たが、文壇、美術界、演劇関係者等の、いわゆる「文化関係」の人々だけは、比較的自由に、殆んどこだわることなく私を仲間に入れてくれた。（黒田、1954、p. 59）

芸術家たちの自由な精神が、黒田との交流を可能にしたといえるだろう。

黒田が訪れた頃のモスクワ文壇は、公式的な唯一の作家組織である「ソヴィエト連邦作家同盟 Союз писателей СССР」が発足する1934年以前の、様々な派閥が、自らこそがソヴィエト文学の担い手たりとしのぎを削っている時期であった。それらの派閥が一堂に集っていた作家のクラブ、「ゲ



図版 1

ルツェンの家」のレストランで、黒田は作家たちとよく顔を合わせた。何か記念すべきイベントがあると、ここで席が設けられ、黒田自身も最後にここで送別会を催してもらった（黒田、1947、p. 263）。「ゲルツェンの家」で出会った人々の一部を記録するのが【資料１、図版１】の寄せ書きである。この寄せ書きについては、黒田本人が発表済みだが（黒田、1948、p. 50）、今回の寄贈資料に原本が含まれていることを特記しておきたい。作家たちの名前の間に「黒田乙吉」との署名もある。「全ロシア作家同盟 Всероссийский союз писателей」とあるのは、黒田の書いたものによれば、「プロ［レタリア作家］とポプーッチキ［попутчики。同伴者を意味する。インテリ系の派閥］のあらゆる団体の上に」あった組織のことである。この寄せ書きの中からは、ピリニャーク、ブダンツェフ、キリロフ、ノビコフ＝プリボイ、リーヂン、リーヂナといった、黒田が後に書いたものに登場したり、手紙を交わす仲となった人物の名を挙げることができる。

黒田が主に付き合ったのは、同伴者系の作家たちのようだ。次に挙げる２名はその代表格となる。

1-1．フセヴォロド・イワノフ

（Всеволод Вячеславович Иванов 1895–1963）

モスクワではじめて彼が訪れた作家は、フセヴォロド・イワノフという、同伴者系に数えられるグループ「セラピオン兄弟」を代表する作家であった。黒田は1925年８月、本学元教授の片上伸に誘われて、イワノフの家を訪れた。イワノフはゴーリキイ門下であり、のちに黒田にゴーリキイに会う機会を作ってくれ、紹介状を用意してくれたのも彼だった。初対面のイワノフを、黒田は「ソヴエト文壇人との交友録」にユーモラスに描写している。

> 初見のイワーノフは、キルギースの血を多分にひいて居るだけに、いかにも東洋的な角張った顔にもみあげのながい、がつしりした人であった。ユーモアに富んだ口許、やさしい目もと、それに少しも気取らないところが直に私を親しませた。〈……〉その後もよくさうして居たが、半ズボンの下に縞の靴下を出して居た。御用商人と言った恰好だ。大きな、黒のロイド眼鏡が東洋風な鼻の上にのかつて［ママ］居た。
>
> （黒田、1947年、p. 253）



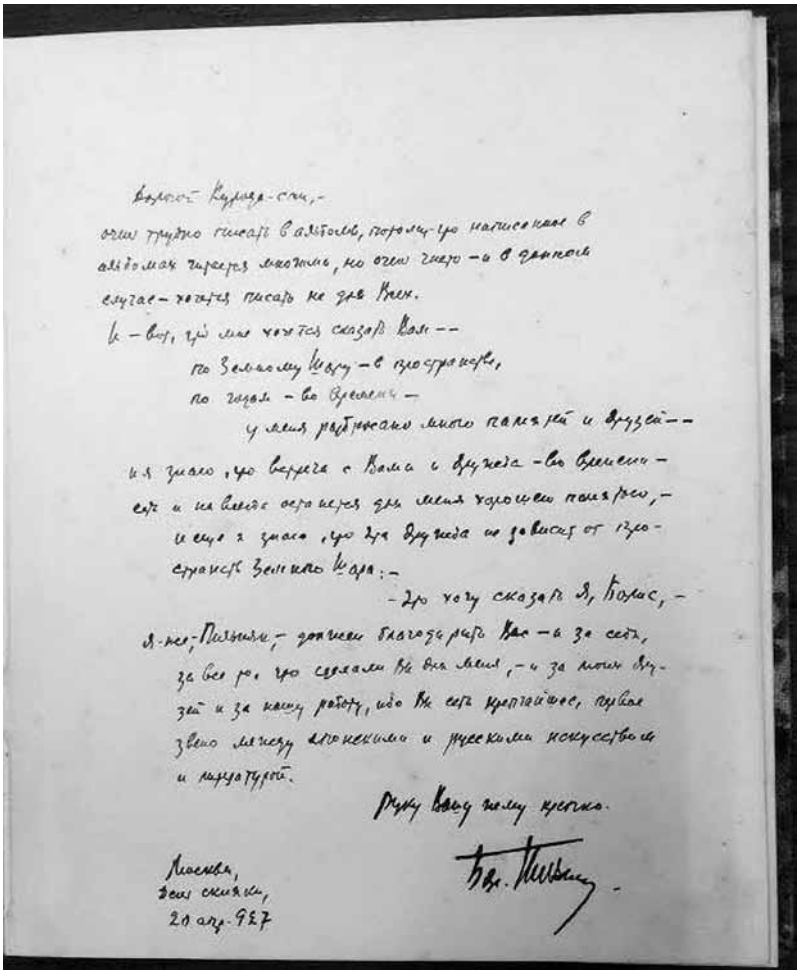
図版２

当館に収蔵された資料の中に、フセヴォロド・イワノフのポートレートと思われる絵が存在する【図版２】。右下に“Всев. Иванов”と書かれており、イワノフ画、黒田のポートレート、の意味にもとれるが、絵はむしろイワノフ本人に似ている。誰の手によるものか不明だが、わりあいにこじんまりとしたスケール感に日本人の手による印象を受けることから、絵師を父に持つ黒田が自ら描いた可能性も考えられなくはない。1927年10月にゴーリキイと共に撮った写真の黒田は眼鏡をしておらず、ひげをたくわえていること（黒田、1920、扉絵 p. 1）、一方、絵にはイワノフ特有の大きな鼻とロイド眼鏡、一文字に結ばれながらもどことなく笑みを含んだ口がはっきり描き込まれていることを考え合わせると、この絵は黒田、もしくはほかの誰かがイワノフを描いたものだという可能性が高い。

１−２．ボリス・ピリニャーク（Борис Андреевич Пильняк 1894–1938）

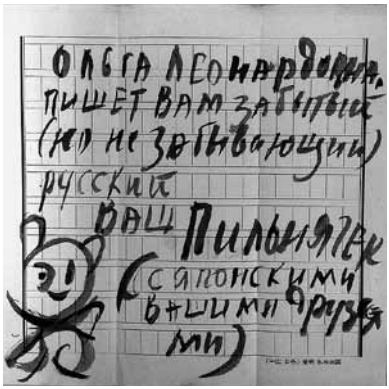
イワノフに次いで黒田に強い印象を与えたのは、ピリニャークのようだ。イワノフの家で彼に出会ってから、黒田はピリニャーク宅にも招かれ、その後も何度か行動をともにしたことが「ソヴエト文壇人との交友録」（黒田、1947）から読み取れる。黒田は彼を「動の人であり、熱の人であり、その盛んな生活力を自らもてあましているような面をもつていた」と評した（黒田、1947、p. 259）。黒田が「知友録」[(2)]と呼んでいた厚紙のノートに、ピリニャークは几帳面な筆跡で感動的な詩的献辞を書いており、彼らの親しい交流の跡をうかがわせる【資料２、図版３】。

また、よく知られているように、ピリニャークは二度ほど日本を訪れている（1926年と32年）。二度目の来日時に書かれたと思われるのが【資料３、図版４】の寄せ書きの手紙である。オリガ・レオナルドヴナという一人の女性に宛てられたそれは、内容からして日本で書かれたこと、その女性と書き手たちはしばらく会っていないことがうかがわれる。まずピリニャークと黒田以外の書き手を明らかにしておきたい。タニ・クロダというのは、

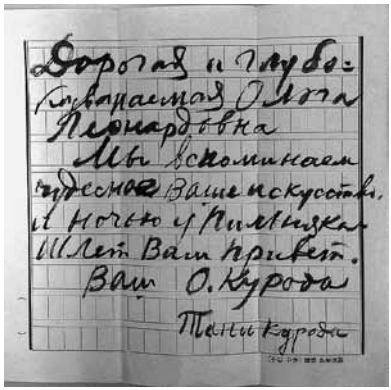


図版３

黒田の妻多仁子のことで、彼女は夫の訪ソに同行していた。「横井」は王子製紙の横井半三郎のことと思われる。横井は沿海州の森林利権会議のために、1925年にモスクワを訪れた(3)。志垣寛は大正初期の新教育運動を牽引した一人であり、ソ連の教育制度視察のために1925年の暮れから翌年の



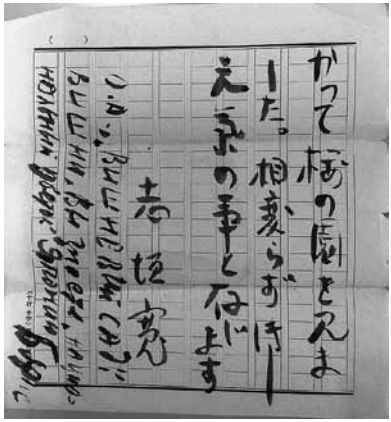
図版４－１



図版４－２



図版４－３



図版４－４

春までモスクワに滞在していた（中野、1991、p. 125）。彼と黒田は熊本師範学校の同窓生でもあった。O. A. は未詳である。

さてこの寄せ書きの宛先となっている女性はだれであろうか。これはチェーホフ未亡人でモスクワ芸術座の看板女優、オリガ・レオナルドヴナ・クニッペル（Ольга Леонардовна Книппер–Чехова 1868–1959）である可能

性が高い。『悩める露西亜』の中で黒田は「チエホフ未亡人の眼」という短い一章をしたためている。夫の作品を演ずる彼女の「チョコチョコした落付きのない芸風」に失望しつつも、『アンナ・カレーニナ』の朗読劇に出演した彼女には強い印象を受けた。

> 頁をめくるとて上目使ひに満場に視線を放つた時余は慧敏にしてなんとも云へぬ魅(チャーム)をもつた未亡人の明眸を見逃すことが出来なかつた。『成る程、チエホフの愛人であつた』と、始めてさとつたやうな気がした。（黒田、1920、pp. 187–190）

宛先がクニッペル未亡人であるとする根拠は、このほかにもある。ピリニャークが1932年に二度目の来日を果たした際に行われた『文藝春秋』の誌上座談会にて、黒田に次のような言葉をかけているのだ。

> ［ソヴィエトにおいて］チエホフはよく読まれているがチエホフ未亡人クニツペルも元気です。〈……〉黒田氏もモスクワでクニツペルと一緒に飲んだことがありましたね。（ピリニャークら、1932、p. 103）

酒を酌み交わす仲だったとすれば、ピリニャークによるいたずら書きの様な戯画や奔放な筆跡の所以も理解できる。原稿用紙に無造作に書かれたそれは、下書きだったか、宴席の勢いに任せて書かれた落書きだったのかもしれない。少なくとも、それを送れるか、もしくは送りたいと思えるほどに、黒田はクニッペル未亡人に対して親しみを感じていたのだろう。

1–3．モスクワ文壇と「スキヤキ会」

1927年、黒田の帰国が決まると、モスクワの作家たちは「ゲルツェンの家」で送別会を開いてくれた。その後、黒田が「自宅でさゝやかな留別の『スキヤキ会』を催した」時にはモスクワの文壇、画壇の人々が20人ばか

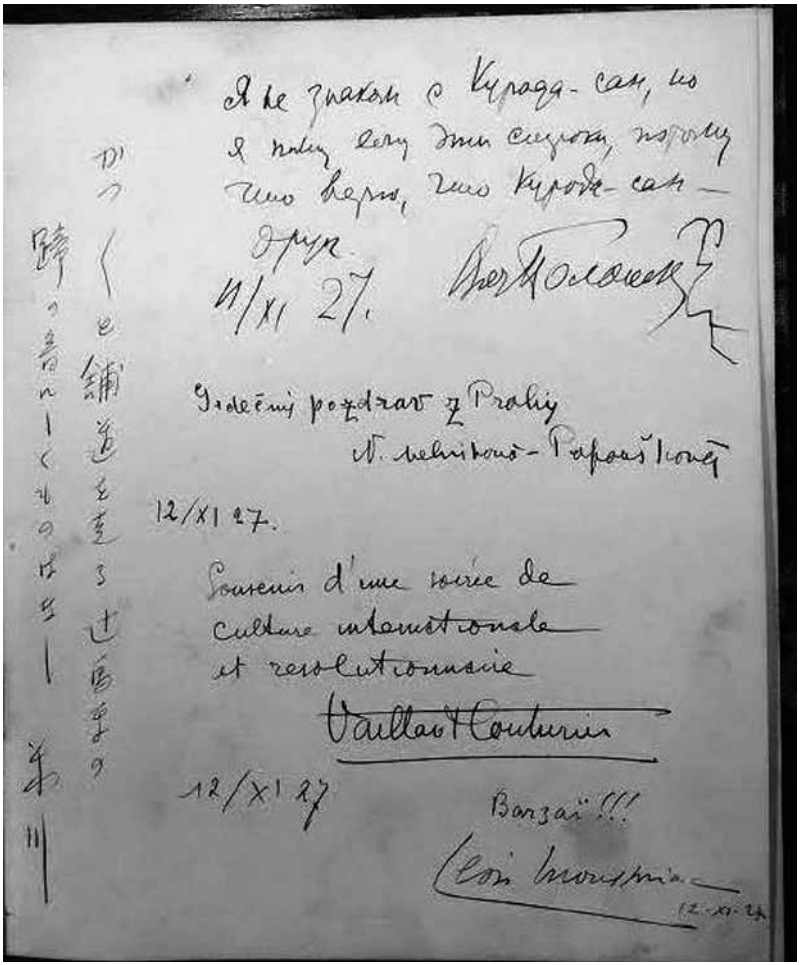
り集まったという（黒田、1947、p. 272、276）。「知友録」のうちこの時に書き込まれたと思われるのが後掲の【資料４】で、ここでは一部を紹介する。署名の日付は1927年11月11日、もしくは12日となっている。二日間開催したのだろうか。この書き込みが「留別の『スキヤキ会』」が行われた際のものという判断をしたのは、まさにその時初めて黒田と会った客たちの署名が含まれているからである。

> 私の寓居の狭い部屋に大勢の客人がたてこんで、主人役の私が接待に忙しい時、懇意な客のＡ君が
> 「珍しいお客さんを引っ張って来たよ」といふ。見るとそれはスウイルスキイ翁夫妻とパーウエル・ニーゾヲイだつた。双方ともはじめて来てくれた人々だ。（黒田、1947、p. 276）

『我が人生記 История моей жизни』[(4)]など最下層の人々の生活について書いたアレクセイ・スヴィルスキーとは、黒田はまともに話す時間がとれなかったが、一方で、農民作家パーヴェル・ニゾヴォイは、宴が果てた後も残って、日本文学のこと、文壇のこと、ロシア文学が日本でどれだけ読まれているかについて、黒田に熱心に聞いた。二人の署名には1927年11月11日とある【資料４－２】。のちに黒田は二人について「私にとりてもつと早く相識るべき作家であった」と述懐している（黒田、1947、p. 278）。「知友録」の同日の他のページにも初対面の客からのメッセージがある【資料４－４、図版５】。宴はにぎやかな方が良い、という友人たちの心遣いでもあったのだろうか。

「知友録」の11日、12日の部分にはロシア人の他、米川［おそらく正夫］ら日本人やフランスなどほかの国の客のメッセージも含まれている【図版５】。多国籍でしかも様々な分野に活躍する人々が集まった宴は、さぞかし盛況であっただろう。

黒田がモスクワから日本へ向けて出立したのは、そのすぐあと、1927年

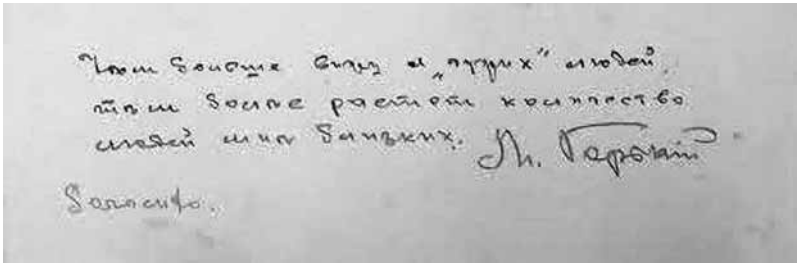


図版５

11月15日のことだった。

２．ゴーリキイに会う

モスクワから帰国する前の1927年10月27日、妻子を伴って向かったイタ



図版６

リア・ソレントにおいて、黒田は宿願を果たす。ゴーリキイは黒田をたいへん歓待した。もちろんこのとき「知友録」にも署名してもらっている【資料５、図版６】（黒田、1932、p. 102、104）。黒田はゴーリキイと会ったときのことについて、生涯にわたり、幾度も活字にして発表しているのだが、その中でも最も早いと思われるのが『東京日日新聞』1927年12月に掲載された全８回にわたる特集記事「イタリーにゴーリキイを訪ふ」である。その切り抜きは今回の寄贈資料に含まれている（掲載情報及び写真部分は切り取られているが、本稿のための調査により掲載日が特定された）[(5)]。記事は、まるでどんなに些細なことも見落としはしまいとでもいうかのように、ゴーリキイ宅へ向かう道中の町の風景から、家並み、ゴーリキイ宅の内装に至るまで、細かく描写するところから始まっている。二人は出会った日の15時から24時まで、さらに翌日も遅くまで話し続けたという。

２−１．ゴーリキイの手紙

黒田は帰国後、ゴーリキイと手紙を交わした。ゴーリキイからのものが二通と黒田からゴーリキイ宛ての手紙が一通、寄贈資料に収められている【資料６、７、８】。ゴーリキイからの手紙については、黒田自身がすでに少なくとも二度、紹介しているが、そのうち、より詳しいのは、黒田の著書『ソヴィエト塑像』中の「ゴーリキイの手紙」の項で、二通の手紙全文の翻訳を、自身による注釈と共に掲載している（黒田、1948、pp. 29–39）。

とはいえ、原語の全文掲載は本稿が初となる【資料６、７】。手紙に続いて黒田の元に届けられた数冊の書籍も、当館に寄贈された。うち、ゴーリキイの自著『クリム・サムギンの生涯』は、扉部分に著者のサインが入っている【資料９】。

そして上記「ゴーリキイの手紙」の原稿が含まれている取材ノートもまた、今回寄贈された(6)。「マクシム・ゴーリキイ M. Горький」と題されたノートなのだが、最初の方は昭和７年（1932年）からの黒田の日記であり、途中からゴーリキイに関する文献のリストや、百科事典の「ゴーリキイ」の項の翻訳、手紙の翻訳、それへの注釈、補足情報の翻訳が続き、黒田によるゴーリキイ研究の記録となっている。

２-２．ゴーリキイ生誕百年祭と講演「人間ゴーリキイを語る」

帰国してからの黒田は、ソ連文壇、画壇の情報に通じる者として、それらの紹介者の役割を果たす。その中で、1968年に開催されたゴーリキイの生誕百周年にまつわる一連のイベントは、黒田の面目躍如たるものとなった。次に挙げるのは寄贈資料からうかがい知られる黒田の活動状況である。

1968年５月18日、日本民主主義文学同盟（現日本民主主義文学会）杉並支部がゴーリキイ研究者のボリス・ビャーリク（Борис Аронович Бялик 1911–1988）を招いて行った講演会に、黒田もスピーカーの一人として参加している。その様子を報告する『日本とソビエト』紙が残されている。

> ビャーリクさんは早速、ユーモアをまじえて話され、黒田先生もゴーリキイと出会ったときの印象や、自分の持っているゴーリキイの文献のことを話され、参加者からも活発な質問がされるなど、時間のすぎるのも忘れる程であった。（「ビャーリク博士、各地で講演」『日本とソビエト』1968年６月５日、２面）

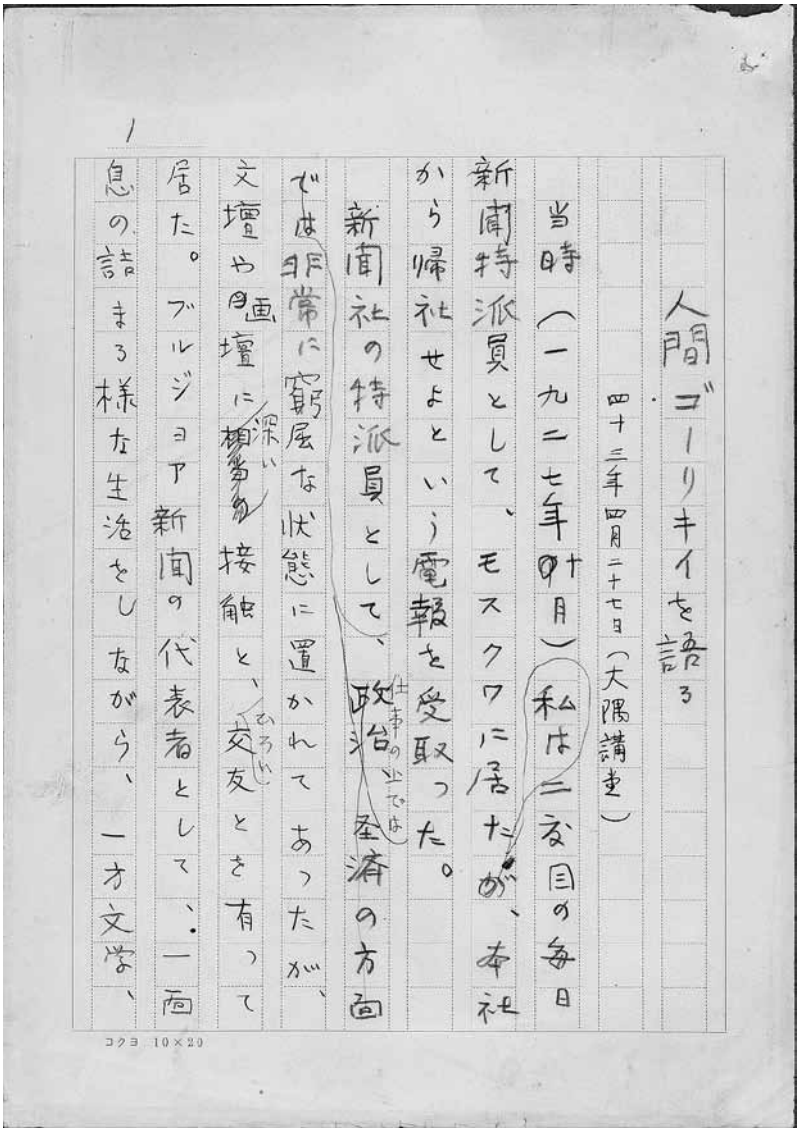
盛会だったらしいことがわかる。



図版７

また、ゴーリキイ生誕百周年を記念して刊行されたパンフレット『Алексей Максимович Горький（1868-1936）』では、除村吉太郎、黒田辰男、野崎韶夫といった本学の教員も含むロシア文学や演劇の専門家、舞台スタッフ、俳優ら総勢21名の執筆者の中に、黒田乙吉も「ゴーリキイ訪問記」をもって加わっている【図版７】(7)。

そして、黒田のゴーリキイとの交流記録の集大成ともいえるのが「人間ゴーリキイを語る」と題した本学大隈講堂での発表原稿だろう。黒田はこの時、齢80を数え、自力での長文の書き取りに不便を感じていたのかもしれない。原稿は２種類あり、片方には複数の人の筆跡が見受けられ【図版８】、もう片方は表紙に「純子（書）」と書かれていることから、おそらくご令嬢の不破純子氏の手で清書されたものである【口絵参照】。ただし、



人間ゴーリキイを語る

四十三年四月二十七日（大隅講堂）

当時（一九二七年9月）私は二ヶ月の毎日新聞特派員として、モスクワに居たが、本社から帰社せよという電報を受取った。

新聞社の特派員として、政治（仕事の上では）全済の方面では非常に窮屈な状態に置かれてあったが、文壇や画壇に深い（ふかい）多数接触と、交友（こうゆう）とを有って居た。ブルジョア新聞の代表者として、一面息の詰まる様な生活をしながら、一才文学、

1

コクヨ 10×20

図版８

後者は前者の途中までの写しで、前者も原稿用紙で39枚あるが内容は途中で切れている。前者には「四十三年四月二十七日（大隈講堂）」と書き込まれており、おそらくこれは1968年４月27日に本学大隈講堂にて行われた「ゴーリキー生誕100年記念講演」の際のものと思われる。黒田のほか、元首相の片山哲や民芸の奈良岡朋子が招かれていた[8]。この原稿には、ゴーリキイと交わした話の内容が、それまでの刊行物と比べて、もっともまとまった形で紹介されている。しかし何よりも強調したいのは、黒田がここで初めて、自分がなぜロシアを目指したのかについて述べていることである。前出の小山内道子も指摘しているように、黒田は出版物においては出来る限り私情を挟まないストイックな姿勢を貫いており、個人的なことについてはほとんど書き残していない（小山内、2013、p. 40）。そのような中で、この発表原稿は特別な存在感を示す。

以下に、黒田が自分とロシア文学との出会いについて語った部分を引用して、本稿を終える。若き日の黒田の熱い思いが伝わってくる文章である。

> マクシム・ゴーリキイは何といっても、当時のソヴェト文壇の大御所であった。ロシアで作家といわれるほどの者で、彼のいき（気息）のかかっていないものは殆んどないという状態であった。
>
> しかし私の特に彼に会いたい理由はこの外にあった。否、この外の理由というのが私にとっては一切だったかもしれない。その時［ロシア渡航時：筆者注］から二十年前、私のはじめて親しんだロシアの作家は（勿論、翻訳を通してであるが）ゴーリキイであった。かの自由と勇気とを讃美した彼の初期の諸作品は、若い我々の心を如何に力強くとらえたか。私は陰険にして臆病な蛇と、奔放で大胆な鷹とを配して、自由、奔放な生活を讃えた「鷹の歌」その他の彼の初期の諸作品をはじめて読んだ時の感激を今でもはっきりと思い出すことが出来る。
>
> 当時、ゴーリキイは私にとって驚異でさえあった。私をロシア研究に走らせたそもゝの動機は、ゴーリキイの諸作品であったかも知れ

ない。

当時、民友社から「怪傑ゴルキイ」と題する本が出た。「不思議なるロシアは不思議なる文豪を生めり」という書き出しで、勇気あり自由を愛する放浪児を讃美したゴーリキイ初期の諸作品を紹介したものであった。

その頃ゴーリキイは私にとりて驚異でさえあった。多感の青年だった私を、ロシア研究に走らせた動機はゴーリキイであったかも知れない。（不破氏による清書原稿から引用）

【資料１】

В Доме Всероссийского союза писателей 4. 02. 27

Иван Евдокимов

Иван Новиков

Михаил Герасимов

Борис Пильняк

Павел Сухотин

Марина Сухотина

В. Львов-Рогачев

Новокшонов

Л. Тихонов

Сергей Буданцев

А. Эфрос

В. Кириллов

А. Новиков-Прибой

Владимир Лидин

О. Щербиновская

П. Дорохов

М. Лидина

Москва февраль 1927

27年２月４日　全ロシア作家同盟の家にて
イワン・エフドキモフ
イワン・ノヴィコフ
ミハイル・ゲラシモフ
ボリス・ピリニャーク
パーヴェル・スホチン
マリーナ・スホチナ
V. リヴォフ＝ロガチョフ
ノヴォクショノフ
L. チホノフ
セルゲイ・ブダンツェフ
A. エフロス
V. キリロフ
A. ノビコフ＝プリボイ
ウラジミル・リーヂン
O. シチェルビノフスカヤ
P. ドロホフ
M. リーヂナ
モスクワ　1927年２月

【資料２】

Дорогой Курода-сан,

Очень трудно писать в альбом, потому что написанное в альбомах читается многими, но очень часто – и в данном случае – хочется писать не для всех.

И – вот, что мне хочется сказать Вам –

По Земному шару в пространстве
По годам во времени
У меня разбросано много памятей и друзей –
И я знаю, что встреча с Вами и дружба – во времени –
Есть и навсегда останется для меня хорошей памятью, –
И еще я знаю, что эта дружба не зависит от пространства
Земного Шара: –
　Это хочу сказать я, Борис,
Я – же, Пильняк, – должен благодарить Вас – и за себя,
За все то, что сделали Вы для меня, – и за моих друзей и за нашу работу, ибо Вы есть крепчайшее, первое звено между японскими и русскими искусством и литературой.
　Жму Вашу руку крепко
Москва　　20. 04. 1927　　Борис Пильняк

　親愛なるクロダ - サン
　アルバムに言葉を書くのはとても難しいです。なぜならアルバムに書かれたことは多くの人に読まれてしまいますが、しばしば――特に今回のようなとき――全員に向けて書きたいわけではないときがあります。
さて、私があなたにお伝えしたいことは――
この地球上という空間に
この幾年もの時間の中に
たくさんの想い出と友人たちが散らばっています。
時間の中でもたらされたあなたとの出会いと友情は
今も生き、また私にとって永遠の良き想い出となることを私は知っています。
そしてまたこの友情が地球という空間に左右されないことも知っています。
　これを言いたいのは私、ボリスであり、

ピリニャークでもある私は、あなたに感謝しなければなりません。自分自身のために、
私のためにあなたがしてくださった全てのことのために、私の友人たちのために、そして私たちの仕事のために。なぜならあなたは日本とロシアの芸術と文学を結ぶもっとも強固にして最初の鎖なのです。
敬具［直訳：あなたの手を強く握る］
モスクワ　1927年04月20日　ボリス・ピリニャーク

【資料３－１】

Ольга Леонардовна, пишет Вам забытый (но не забывающий) русский
Ваш Пильнячек (с японскими Вашими друзьями)

オリガ・レオナルドヴナ、あなたに忘れ去られた（けれど忘れていない）あなたを敬愛するロシア人のピリニャチョーク（と日本のあなたの友人たち）があなたにお便りします。

【資料３－２】

Дорогая и глубокоуважаемая Ольга Леонардовна.
Мы вспоминаем чудесное Ваше искусство и ночью у Пильняка шлет Вам привет.
Ваш О. Курода　Тани Курода

親愛なる、そして深く尊敬すべきオリガ・レオナルドヴナ
私達はピリニャークのところにいる夜にも、素晴らしいあなたの芸術を思い出します。挨拶を送っています。
かしこ［直訳：あなたの］O. クロダ　タニ・クロダ

【資料３－３】

盛名をきいて親しく尊顔を拝せす　遥に神技を噂して而かも観るを得す
遠く御健康を祝して日蘇の親交の　芸術より益々深厚ならんことを祈る
横井生

【資料３－４】

かつて桜の園を見ました。相変らず［御］元気の事と存じます　志垣寛

O. A. «Вишневый сад» Вишни, Вы знаете, национальный цветок Японии.
Б.....(?)

O. A.『桜の園』の桜は、ご存知ですね、日本の国花です。B.....［以下判読困難］

【資料４－１】

Милый Курода-сан, мне очень жаль, что приходится с Вами расставаться, но надеюсь, что наша разлука будет не долгой и Вы опять скоро вернетесь к нам в СССР!
11. 11. 27
Е. Фолькман

親愛なるクロダ - サン、あなたとお別れしなければならないことをとても残念に思います。でも、私たちの別離が長くはならず、あなたがまたすぐにソ連の私たちのところへ戻ってくださることを願っています！
27年11月11日
E.［エレーナ］フォルクマン［Елена Августовна Фолькман 生没年未詳、日本学者］

【資料４－２】

Для меня Япония – страна чудес, японцы – волшебники, и японки – нежные сказки юности.

11. 11. 27　Москва　　А. Свирский

私にとって日本は不思議の国、日本男性は魔法使い、そして日本女性は若き日の優しいおとぎ話のようです。

27年11月11日　モスクワ　　A. スヴィルスキー

Вы уезжаете в страну солнца и хризантем....

Чтобы скорее возвратиться затем (обратно к нам)

11. 11. 27　　В. Кириллов

あなたは太陽と菊の花の国に帰ってしまう……

出来るだけ早く（我々の元に）戻っていらっしゃいますように。

27年11月11日　　V.［ウラジミル］キリロフ［Владимир Тимофеевич Кириллов 1890–1937、プロレタリア作家］

Глубоко убежден, что близок тот день, когда между писателями России и Японии установится самое искреннее, самое сердечное сердечное общение.

11. 11. 27　　Павел Низовой

ロシアと日本の作家たちの間に、本当に心からの、本当の意味で親しい関係の結ばれる日が近いことを強く確信しています。

27年11月11日　　パーヴェル・ニゾヴォイ［Павел Григорьевич Низовой 1877–1940］

【資料４－３】

На земле Японии, на земле цветущих вишен и древней культуры, я рад буду пожать руку нашему другу Куроде-сан. Моя мечта побывать в этой стране, дружество и братство которой я чувствую всем существом.

11. 11. 27　　Москва　　Вл. Лидин

日本の地で、咲き誇る桜と古代文化の地で、我々の友人黒田さんの手を握ることをうれしく思うでしょう。その友情と兄弟愛をからだ全体で感じることのできる国を訪れることは私の夢です。

27年11月11日　モスクワ　　Vl.［ウラジミル・］リーヂン［Владимир Германович Лидин 1894–1979、作家、来日は叶わなかった］

【資料４－４】

かつ〳〵と舗道を走る辻馬車の
蹄の音にしくものはなし　　米川

Я не знаком с Курода-сан, но я пишу ему эти строки, потому что верю, что Курода-сан — друг

11. 11. 27

Олег Поляков (?)

私はクロダ - サンをよく知ってはいませんが彼にこのメッセージを送ります。クロダ - サンは私にとって友人であると信じているからです。

27年11月11日

オレーグ・ポリャコフ［不詳］

【資料４－５】

Дорогой Курода-сан! Как бы далеко Вы не уехали от Москвы, Вы всегда

будете близки нам, москвичам, сердечно сожалеющим о Вашем отъезде.

12. 11. 27　Москва　　О. Щербиновская

親愛なるクロダ - サン！　たとえあなたがモスクワから遠く離れたとしても、あなたの出立を心から残念に思っている我々モスクワっ子にとってあなたはいつも近い存在であり続けるでしょう。

27年11月12日　モスクワ　O.［オリガ］シチェルビノフスカヤ［Ольга Сергеевна Щербиновская 生没年未詳、マールイ劇場の女優、ピリニャークの２番目の妻］

【資料４－６】

Привет .....(?) Японии и ее тонкому, талантливому и чуткому народу.

12.11.27　　.....(?)

［……判読困難］日本と、その繊細で才能あふれ感受性の強い民族によろしくお伝えください。

27年11月12日　　［……判読困難］

【資料５】

Чем больше вижу я «чужих» людей, тем более растет количество людей мне близких.

М. Горький

「他」人に会えば会うほど、近しい人々の数が増える。

M. ゴーリキイ

【資料６】

Письмо Горького

Уважаемый Курода-сан!

Получил Вашу посылку, сердечно благодарю Вас за любезность.

Посылаю Вам мою книгу. Раньше этого послал еще две: Пришвина «Охота за счастьем» и Сергеева-Ценского «Ваня»

Вы обещали мне прислать фотографий себя, супруги и милой Вашей дочки, – не забудете?

Некоторые из репродукций из Японии, присланного Вами изумительно красивы. Я даже вырезал одну из них и вставил в рамку.

Мой душевный привет Вам, мое почтение супруге и поклон .....(?)

Крепко жму руку

М. Горький

24. 1. 28　Sorrento

ゴーリキイの手紙

尊敬すべきクロダ - サン！

あなたの小包を受け取りました。あなたのご親切に心より感謝申し上げます。

あなたに自著をお送りします。以前に、２冊お送りしました。プリーシヴィンの『幸福への願望』とセルゲエフ＝ツェンスキイの『ワーニャ』です[(9)]。

あなたは私に、ご自分と奥様、それからかわいいあなたの娘さんの写真を送ってくださると約束しましたね、忘れないでしょうね？

あなたが日本から送ってくださった複製画のうち数枚は驚くほど美しいです。私はそのうちひとつを切り取って額に収めさえしました。

私の心からのあいさつをあなたに。私の尊敬を奥様に、そして［……判読困難］おじぎを。

敬具［直訳：強く握手する］

M. ゴーリキイ

28年１月24日　ソレント

【資料７－１】

Уважаемый и дорогой Курода-сан!

Хотя Вы не ответили мне получены – ли Вами книги – посылаю еще три. Обратите особое внимание на Колоколова «Мед и кровь» и на рассказ Копыловой «Богатый источник». Авторы – новички в литературе, но Колоколов, несомненно, очень талантлив и в его книге вопрос гуманизма поставлен с редкостью исключительной.

Я аккуратно получаю посылаемые Вами издания. Совершенно изумлен той легкостью, той дьявольской талантливостью, с которой Ваши художники–скульпторы и живописцы – овладели традициями и канонами классической скульптуры и европейской живописи. Некоторые скульпторы, например, Рио Гото, Такео Кимура и др. особенно поражают усвоением не только техники, но духа великой классики. В живописи хороши должно быть С. Окубо, Коси Гото, М. Ямамото, но, разумеется не надо забывать, что я сужу то слишком. В общем все снимки дают такое впечатление: ваши художники много приобрели ничего не потеряв.

Это меня особенно радует – я искренно люблю и никогда не перестаю восхищаться подлинно японским искусством.

尊敬すべき、そして親愛なるクロダ - サン！

本を受け取ったかどうかのお返事をあなたからはいただいておりませんが、もう３冊お送りします。コロコロフの『蜜と血』とコプィロワの『豊富なる源泉』に特に注目してください。作家たちは文壇の中では新人ですが、コロコロフがとても才能に恵まれていることは疑いなく、彼の著作の中ではヒューマニズムの問題が並はずれて鋭く提示されます。

私はあなたが送ってくださった本をきちんと受け取っています。わたし

は日本の芸術家・彫刻家と画家たちが、古典彫刻とヨーロッパ絵画の原則と伝統を自家薬籠中の物としている、その悪魔的なまでの才能にまったく驚嘆しています。何人かの彫刻家、例えばゴトー・リョー［後藤良］、キムラ・タケオ［木村威夫］やそのほかの人達は技術だけでなく偉大な古典の真髄をも会得していることで特に驚かされます。絵画ではオークボ・S.［大久保作次郎］、ゴトー・コーシ［後藤工志］、ヤマモト・M.［山本森之助］の作品が良いに違いないですが、私の評価は厳しすぎるものだということをもちろん忘れないでください。全体として、すべての写真はこんな印象を与えます。日本の芸術家たちは何も失わないままに多くを得た、と。

これは私にとって特に喜ばしいことです。私は真の日本の芸術を心から愛し、いつまでも魅了され続けることでしょう。

【資料７－２】

С восторгом любуюсь изящной красотой снимков с японских работ. Чудесные вещи.

Меня приглашали в Токио, читать лекции, но эта поездка невозможна для меня, да и лекции читать я не могу, не мое дело. Но побывать в Японии просто, как все люди, а не в качестве «знатного» иностранца – моя мечта и хочется, чтобы она осуществилась.

Знаете, Курода–сан, что забыли Вы сделать? Прислать мне фотографию Вашей дочери, как обещано Вами. Сделайте это, прошу Вас!

Привет супруге и дочери.

Крепко жму руку Вашу, благодарю за внимание.

М. Горький

6. 12. 28　Sorrento

日本の作品の写真の洗練された美しさに狂喜の目で見とれています。素

晴らしい作品です。

講演会をするようにと東京に招待されたこともありましたが、そういった旅行は私には不可能ですし、だいたいにおいて講演をするなどというのは私には向いていませんからできません。けれど日本をただ訪問する、「有名な」外国人としてではなく普通の人として――というのが私の夢で、その夢が実現することを願っています。

ところで黒田さん、あなたは何かをし忘れていませんか？　約束してくださった通り、あなたの娘さんの写真を私に送ってくださることですよ。お願いしますよ！

奥様と娘さんによろしく。

敬具［直訳：強く握手します。お心遣いに感謝します］

M. ゴーリキイ

28年12月６日　ソレント

【資料８－１】

Уважаемый Алексей Максимович!

Я не могу найти слов, как извиниться перед Вами, что я так долго молчал. Мое неисполнение своего обещания заставило себя совсем упустить надлежащее время написать Вам письмо. Простите, пожалуйста, я Вам не писал даже ни благодарственного, ни извинительного письма.

Мне хотелось собирать хоть книги, написанные в Японии про Вас и переводы Ваших произведений, и с этими книгами сразу написать Вам обо всем, однако, книги до сих пор собраны неудовлетворительно. Думаю, если ждать как я буду аккуратно исполнить свое обещание, то может-быть

尊敬すべきアレクセイ・マクシモヴィチ！

こんなにも長い間手紙を書かず、あなたになんとお詫びしたらよいのか言葉も見つかりません。お約束を果たしていないことが、あなたへお手紙

を書くための時間を完全に失わせました。お礼の手紙もお詫びの手紙も書かなかったことをお許しください。

私はせめて日本であなたについて書かれた本とあなたの作品の翻訳を集めて、それらの本といっしょに手紙を出して、そこにすべて書こうと思っていたのですが、本は今に至るまであまり集まっていません。私が約束したことをきちんと守れるまで待っていたら、もしかしたら

【資料８－２】

придется еще долго продолжать такое положение.

Так я беру на себя смелость написать Вам здесь маленькое письмо. В течении этих времен я с большою благодарностью получил с Вас два письма и книги: «Жизнь Клима Самгина», Н. Колоколова «Мед и кровь», П. Слетова «Прорыв» и Л. Копылова «Химеры».

О «Жизни Клима Самгина» весь японский литературный мир знает. Если Вы разрешите, мне хотелось бы перевести Ваш «Сорок лет» на японский. Недавно я написал в Литературном японском журнале о произведениях

このような状態がさらに長く続くのではないかと思われます。そのようなわけでここで思い切って短いお手紙を書くことにしました。これまでの間に私はあなたから二通のお手紙と次のような本をたいへん感謝しながら受け取りました。『クリム・サムギンの生涯』、N. コロコロフの『蜜と血』、P. スリョートフの『破口』、それから L. コプィロフの『キマイラ』です。

『クリム・サムギンの生涯』は日本の全文壇が知っています。もしお許しいただけるなら私はあなたの『40年』を日本語に訳したいです(10)。最近私は日本の文学誌にこれらの新しい作家たちの作品について書きました。

【資料８－３】

этих новых писателей. «Мед и кровь» мне особенно интерестно.

Главный редактор газеты «Осака-Майнити» господин Кидо хотел Вас пригласить в Японию как гость газеты «Осака-Майнити». Раз Вы не можете читать лекции, не будем просить об этом, просто приезжайте. Мы Вас очень очень ждем. Господин Кидо предлагает Вам, чтобы Вы воспользовались всякими нашими организациями к Вашим пребыванию в Японии. Если приедете, лучше весною, т.е. с середины марта до дождевого времени (середина июня).

Получили ли Вы фотографический

私は特に『蜜と血』に興味があります。

『大阪毎日』紙の編集主幹、城戸氏[11]があなたを『大阪毎日』紙の招待客として日本へ招きたいそうです。講演はできないということであれば、それはお頼みしません。ただいらしてください。私たちはあなたの来日を強く待ち望んでおります。あなたの日本滞在にあたって、我々は協力してあらゆる手段を尽くします。もしいらっしゃるなら、春の方が良いです。つまり、３月半ばから雨の季節（６月半ば）までです。

あなたは写真の……を受け取ったでしょうか

【資料９】

O. Курода-сан

На память и с глубокой симпатией

М. Горький

O. クロダ - サン

記念と深い共感の印に

M. ゴーリキイ

【文献表】

黒田乙吉（1920）『悩める露西亜』弘道館、1920年、再刊『ソ連革命をその目で見た一日本人の記録：旧名悩める露西亜』世界文庫、1972年。

黒田乙吉（1932）「ゴーリキイの手紙」『主婦之友』（26巻９号）婦人之友社、1932年、102–104頁。

黒田乙吉（1947）「ソヴエト文壇人との交友録」『ロシヤ文学研究』（第２集）ソヴエト研究者協会文学部会編、新星社、1947年、248–278頁。

黒田乙吉（1948）『ソヴィエト塑像』明倫閣、1948年。

黒田乙吉（1954）「ソ連画壇とコンチャロフスキー：ロシヤと四十年　ソ連今昔物語（13）」『ソ連研究』（３巻５号）、ソ連問題研究会、1954年、59–63頁。

太田丈太郎（2014）「生きているゴーリキー―モスクワ特派員・黒田乙吉」、「ヴォークスをめぐる人々―『日本文学の夕べ』」『「ロシア・モダニズム」を生きる―日本とロシア、コトバとヒトのネットワーク』成文社、2014年、112–157頁。

小山内道子（2010）「『月刊ロシヤ』（1935～1944）を渉猟して――雑誌の起源、そして米川文子、マトヴェーエフ、黒田乙吉を読む――」中村喜和、長縄光男、ボダルコ・ピョートル編『異郷に生きる V』成文社、2010年、239–253頁。

小山内道子（2013）「『日本最初のモスクワ特派員』・黒田乙吉――明治末期日本のロシア文化環境からハルビンへ――」『Север』（29）ハルビン・ウラジオストクを語る会、2013年、38–50頁。

菊地昌典（1974）「黒田乙吉翁小伝」『季刊社会思想』（３巻３回４号）1974年、155–179頁。

中野光（1991）『教育改革者の群像』国土社、1991年。

ボリス・ピリニャーク、黒田乙吉、山本有三、菊池寛（1932）「ピリニャーク氏に物を訊く座談会」『文藝春秋』（10巻７号）文芸春秋、1932年、94–104頁。

注

(1)　このあとの経由地ハルビンでの６年に及ぶ滞在期間のことについては、本人が手記「明治末期のハルビン」［当館所蔵］を残しており、それが部分的に「黒田乙吉翁小伝」（菊地、1974）で紹介されている。なお、残された原稿が途中までであることには菊地氏も言及している。

(2)「記念帳」と書いたものもある（黒田、1932、p. 104）。

(3)　横井半三郎こそが黒田を画家のコンチャロフスキーに引き合わせた人物である（黒田、1954、p. 62）。

(4)　*Свирский А. И.* История моей жизни. М., 1935.

⑸ 「イタリーにゴーリキイを訪ふ」『東京日日新聞』1927年12月10日～20日朝刊（12、18、19日は除く）の各第４面。

⑹ 黒田はいつもあらかじめ頭の中で文章を組み立ててから原稿を書いていたのか、もしくは他に下書きをしていたのか、残されていた原稿には刊行されたものとの大きな違いはほとんど見つからないのであえてここで翻刻はしない。

⑺ 『Алексей Максимович Горький（1868–1936）』出版社不明、［1968年］。

⑻ 「会と催し」『早稲田』60号、早稲田大学広報課、1968年４月19日。

⑼ タイトルの訳は黒田の著作に従う（黒田、1948、p. 29）。

⑽ 黒田によれば、『40年』は、『クリム・サムギンの生涯』を第一巻とする長編の名であるが（黒田、1948、p. 32）、『日本大百科全書』の佐藤清郎の記事では「40年」は『クリム・サムギンの生涯』の副題であると説明されている。佐藤清郎「クリム・サムギンの生涯」『日本大百科全書７』小学館、1994年、662頁。

⑾ 城戸元亮（1881–1966）。

（さいとう　けいこ　早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）